

D I 論文

格表示は名詞と動詞の間でなされる

－言語は元来SOV型(日本語型)か－

今泉 喜一

要 旨

構造伝達文法では「格」を「名詞を動詞や形容詞に論理関係で結びつける力」と定義する。ここから「格表示は名詞と動詞・形容詞の間でなされる」という仮説が導かれる。この仮説の妥当性を語順がSOV型(日本語型)の言語とSVO型(英語型)の言語で確認する。格表示形式は前者で後置詞となり後者で前置詞となる。後置形式と前置詞の両方をとるロシア語のような言語においても、印欧語の歴史を検討すれば、この仮説による説明が可能であることから、この仮説は仮説として妥当であるということになった。さらに、印欧語ももとは日本語と同じSOV語順であったことを確認した。

キーワード： 構造伝達文法、格、後置詞、前置詞、印欧語

D I.1 研究対象となる事実と問題

研究対象の事実 語順が日本語のようなSOV型の言語は後置詞を持ち、
英語のようなSVO型の言語は前置詞を持つ傾向がある。

「S」は「主語」の意味。

「O」は「目的語」の意味。……本稿では「名詞N」でも表す。

「V」は「動詞」の意味。

日本語は、SOV型の言語である。

私が ー 本を ー 読む
主語 (S) ー 目的語 (O) ー 動詞 (V)

一方、英語はSVO型の言語である。

I ー read ー a book
主語 (S) ー 動詞 (V) ー 目的語 (O)

「目的語 O」は主語以外の名詞の象徴なので、本稿では一般の文の中で、主語以外の名詞を示すときは、「名詞 N」で表すこともする(O→N)。たとえば次のようになる。

SOV型 私が バスで 学校に 行く。
(S が N で N に V)

SVO型 I go to school by bus.
(S V to N by N)

ここに見られるように、日本語では格を表す格助詞が「名詞の後」に置かれており、

英語では格を表す前置詞が「名詞の前」に置かれている。(主語Sについては、D I .4bの〈注〉を参照。)

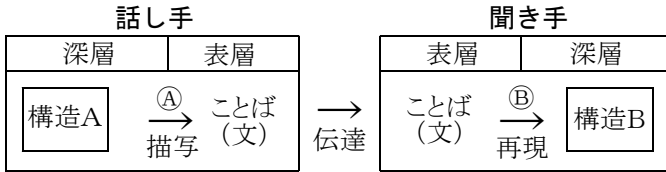
本稿では、なぜこのような「格を表す要素」に「後置・前置」の違いが生じるのかについて、第1, 第2の疑問を設定して考えたい。

ここでの考察には構造伝達文法の考え方をを用いるので、まず「構造伝達文法」について述べておく必要がある。「格」の定義も示す。

D I .2 構造伝達文法における格

D I .2.a 構造伝達文法

話し手は不断に各種の判断を行う。その判断は論理構造をなしているのので、その判断を(判断)構造Aと呼ぶ。この構造Aをそのまま聞き手に伝達することはできないので、下図に示すように、話し手は構造Aを表層にあることばで描写して(Ⓐ), 文の形にして聞き手に伝達する。



図D I -1 判断構造Aを描写してことば(文)で伝達し、聞き手が構造を再構成する

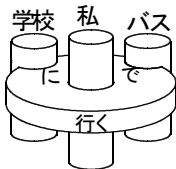
聞き手は聞いた文(ことば)に基づいて(判断)構造Bを再現する(Ⓑ)。構造が正しく再現されれば構造Bは構造Aと同じになり、聞き手の中に話し手の判断が正しく伝達されたことになる。Ⓐの描写とⒷの再現の過程には慣習的な規則(文法)が存在する。

表層は意識的な層であり、意識による制御が可能であるが、深層は本能的な層であり、意識による制御ができない。

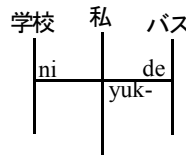
「構造伝達文法」というのは、深層にある判断構造を立体モデルで示し、表層に表れる文の現象を深層構造のあり方と描写法から説明しようとする「説明文法」である。

D I .2.b 深層構造のモデル

「私が学校にバスで行く。」という表層の文があるとき、これに対する深層構造(判断)モデルは下左図のようなものである。下右図はモデルを簡略表示したものである。



図D I -2 私が学校にバスで行く



(簡略表示)

図D I -3 私が学校にバスで行く

D I .2.c 格の定義

構造伝達文法では「格」を「名詞を動詞や形容詞に論理関係で結びつける力」と定義している。そして、その力がそこに存在することを示す詞を「格詞」と呼ぶ。

格詞は日本語では従来「格助詞」と呼ばれてきた。英語では「前置詞」と呼ばれている。(ただし、一般の英語文法ではこのように定義されておらず、「格」とはさまざまな統語機能を表示する「名詞の語形変化」であるとされる。現代英語の名詞には属格と単純格があるが、主要な代名詞にはさらに主格と対格が残っていると言われる。D I .8.b)

文が文として成立するのは名詞と動詞の間に格の力(論理関係)が働いているからである。格詞がその力(論理関係)の存在を明示している。(本稿では形容詞については触れずに、名詞と動詞の論理関係のみを扱う。)

たとえば、図D I -2 では、「学校」「バス」という2つの名詞が、「行く」という動詞と(格詞「に」「で」の示す) 格の力(論理関係)によって結びついている。

学校に 行く 「に」は「学校」が「行く」の「目的地」であるとの論理関係を示す。

バスで 行く 「で」は「バス」が「行く」の「手段」であるとの論理関係を示す。

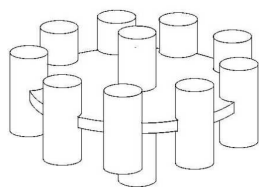
「格」(論理関係)を表す格詞は、日本語には下表のように 11 ある。

表D I -1 日本語の格詞

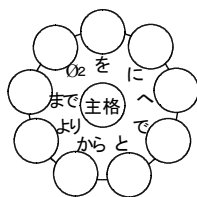
主格詞	〇 ₁ , が
客格詞	を, に, へ, で, と, より, から, まで, 〇 ₂

〇₁, 〇₂ については今泉(2012:第2章)参照

「格」は構造モデルでは下左2図のように動詞に対する名詞の立つ「位置」として示される。動詞は大きな円盤によって表される。それで、たとえば、「私が会場で彼と 10時から 11時まで 60分歌を歌う。」という文の構造は下右図のようになる。

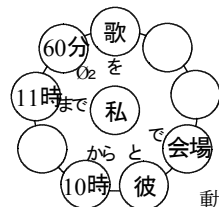


a) 斜め上から見る



b) 真上から見る

図D I -4 各格の位置



動詞は「歌う」

私が会場で彼と 10 時から 11 時まで
で 60 分の歌を歌う 図D I -5

英語では「格」すなわち名詞と動詞の論理関係は「前置詞」が示す。たとえば、

I go to school by bus.

という文で、school, bus という名詞は、それぞれ to, by という前置詞が表す論理関係で go という動詞と結びついている。

go to school

to は school が go の「目的地」であるとの論理関係を示す。

go by bus

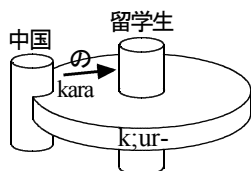
by は bus が go の「手段」であるとの論理関係を示す。

英語の前置詞には、ほかに after, among, at, between, for, in, on, over, up, with など数多くのもがある。ただし、of は前置詞ではあるが、格を表さない場合が多い。

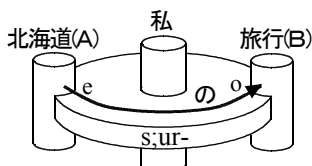
D I .2.d 「の」は格を示さない

「私は中国の留学生と話をした。」という文にある「中国の」の「の」は国文法では格助詞とされている。これは国文法では「格とは名詞が文中で(名詞を含む)他の語に対して持つ関係である。」と定義しているため、「の」が格とみなされているからである。

構造伝達文法では、「の」は構造上に立つ2つの名詞をつないで描写(表層化)し、2つの名詞の間に一定の論理関係が「ある」ことを示すだけで、名詞と動詞の「格(論理関係)」そのものを表してはいない、と考える。そして、「の」は構造上では、「中国の留学生」のように、下左図にあるような矢印で示される。「中国」は動詞「来る」に対する格としては「から」格に立っている。同様に「北海道の旅行」は下右図のように示される。



図D I -6 中国(から)の留学生



図D I -7 北海道(へ)の旅行

つまり「の」は、構造伝達文法で定義している格を示してはいないので、「格詞」ではない。(「実体つなぎ描写詞」である。今泉 2012:42, 今泉 2015:18 等参照。)

以上において「構造伝達文法」と「格」について必要な記述を行ったので、本題に戻ることにする。

D I .3 SOV型(日本語型)は後置詞, SVO型(英語型)は前置詞

世界中の言語を語順のタイプで分けると6つに分類できる。その出現の割合は表D I -2 のとおりであるが、日本語型のSOV型が最も多く、ほぼ半数を占める。主語Sが目的語Oより前にある3つの語順の型 (SOV, SVO, VSO) は合計で 95 %を超える。

D I .1 で述べたとおり、日本語のようなSOV型の言語は後置詞を持ち、英語のようなSVO型の言語は前置詞を持つ傾向がある。この傾向について、松本(2006:175)は表D I -3 に見るように、OV型の言語とVO型の言語の対比という形で数値で明らかにした。この表から、OV型(日本語型)の言語の 96 %強が後置詞を持ち、VO型(英語型)の言語の 86 %強が前置詞を持っていることが分かる。では、なぜこのような傾向があるのか。これが第1の疑問である。

第1の疑問 なぜ日本語のようなSOV型の言語は後置詞を持つ傾向があり、英語のようなSVO型の言語は前置詞を持つ傾向があるのか。

表D I-2 諸言語における基本語順の出現頻度

語順のタイプ	言語数	百分率
SOV	771	49.3%
SVO	547	35.0%
VSO	175	11.2%
VOS	44	2.8%
OVS	16	1.0%
OSV	10	0.6%

松本(2006:211)

表D I-3 語順の型と後置詞・前置詞の割合

語順の型	後置詞	前置詞
O-V	606	23
〈日本語型〉	(96.34%)	(5.66%)
V-O	88	554
〈英語型〉	(13.71%)	(86.29%)

〈 〉内は今泉補充 松本(2006:175)

この第1の疑問について、構造図を用いつつ考えてみたい。

なお、この疑問に対して従来は、SOV型の言語には「左向き支配」(「rectum 支配されるもの」が「regens 支配するもの」に先行する配列にある)があり、SVO型の言語には「右向き支配」(regens が rectum に先行する配列にある)があるからであると考えられてきた(松本, 2006:39)。(下降型・上昇型, 遠心型・求心型としての扱いもある松本, 2006:175)。しかし, 「左向き支配」だとなぜ後置詞になり, 「右向き支配」だとなぜ前置詞になるのかについては説明されてはいなかった。本稿では構造伝達文法の視点からこの説明を行うことにする。

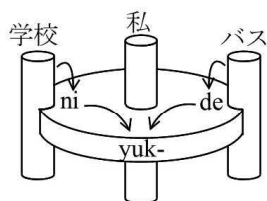
D I.4 格表示の位置……名詞と動詞の間

D I.4.a 名詞と動詞と格を構造図で示す

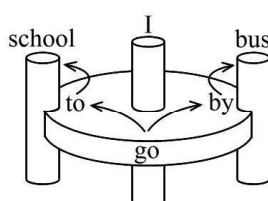
日本語と英語の文を構造モデルで示してみる。

私が学校にバスで行く。…… この文の構造は下左図のようになっている。

I go to school by bus. …… この文の構造は下右図のようになっている。



図D I-8 私が学校にバスで行く



図D I-9 I go to school by bus

両者の構造は同じであるが、これを文にするときには描写の順序が異なる。つまり、SOV型である日本語では、次のように名詞Nが先になり、動詞Vが最後になる。

日本語 SOV型 [S N V]

SVO型である英語は、次のように主語以外の名詞Nが動詞Vの後になる。

英語 SVO型 [S V N]

名詞Nが文の中に存在するためには「格」という論理関係で動詞と結びついている

ればならないのだから、名詞Nは格詞を用いて格を表さなければならない。

格詞による格の表示位置はどこが適切かといえば、格は「名詞」と「動詞」の論理関係なのであるから、名詞Nと動詞Vの「間」であることが最も自然なことから考えられる。つまり、格表示の位置は次のようになる。(図D I-8、図D I-9の矢印が参考になる。)

日本語	SOV型	[	S	<u>N</u>	[格表示]	<u>V</u>	]
英語	SVO型	[	S	<u>V</u>	[格表示]	<u>N</u>	]

D I.4.b 日本語は後置詞、英語は前置詞

ということは、SOV型では名詞Nの後で格表示が行われ(N-格)、SVO型では名詞Nの前で格表示が行われる(格-N)はずである。事実、確かにそのようになっており、日本語と英語とでは格表示が後置詞と前置詞の違いとして表れている。

日本語	SOV型	[	S-ga	<u>N-ni</u>	<u>N-de</u>	V	]	格表示は名詞Nの後
英語	SVO型	[	S	V	<u>to-N</u>	<u>by-N</u>	]	格表示は名詞Nの前

〈注〉Vに対して主格にある「S」は主格であることが明白であるので、日本語でも英語でも格表示を行う必要がない。主格という格は、格(論理関係)は存在するが、格表示の必要がない。日本語でも「雨₀₁ 降る。」「私₀₁ 学生です。」のように本来の主格は格表示形式がない。主格を示す「が」は鎌倉・室町時代に生まれた「制限された主格」を示す格表示形式であって、本来的な主格表示形式ではない。

D I.4.c 「格表示は名詞と動詞の間でなされる」を仮説とする

第1の疑問「なぜ日本語のようなSOV型の言語は後置詞を持つ傾向があり、英語のようなSVO型の言語は前置詞を持つ傾向があるのか」に対する説明が上述のことで可能であるようである。そこで、「格表示は名詞と動詞の間でなされる」という考えを仮説とすることにする。

第1の疑問への解答……仮説

SOV型(日本語型)の言語は後置詞を持つ傾向があり、

SVO型(英語型)の言語は前置詞を持つ傾向がある。

……格表示が名詞と動詞の間でなされるからではないのか。

次のD I.5以降で、この仮説が当てはまらないように見える現象について考察する。

D I.5 仮説「格表示は名詞と動詞の間でなされる」は正しいか

D I.5.a ロシア語には適用できない?

上に導かれた仮説「格表示は名詞と動詞の間でなされる」が正しいものとする、次のようなロシア語の事実をどう考えればよいのだろうか、「ロシア語でもこの仮説は成立するのか」という第2の疑問が生じる。

第2の疑問

ロシア語でもこの仮説が成立するか。

……格表示は本当に名詞と動詞の間でなされるか。

現代ロシア語は次のようにSVO型(英語型)の言語である。

(ロシア語の読み方を簡単に<>の中に英字で示しておく。)

Я пишу письмо. <Ya pishu pisimo.>
私 書く(1人称) 手紙 (私は手紙を書いている。)

この文に「兄に」という要素を付け加えると次のようになる。

Я пишу письмо брату. <Ya pishu pisimo bratu.>
私 書く(1人称) 手紙 兄に (私は兄に手紙を書いている。)

ロシア語には名詞Nに格変化があり、「брат <brat> (兄弟)」という名詞は単数の場合次のように変化する。

主格	брат	(兄弟が)	<brat>
生格	брата	(兄弟の)	<brata>
与格	брату	(兄弟に)	<bratu>
対格	брата	(兄弟を)	<brata>
造格	братом	(兄弟によって)	<bratom>
前置格	brate		<brate>

つまり、

Я пишу письмо брату. <Ya pishu pisimo bratu.>
私 書く(1人称) 手紙 兄に (私は兄に手紙を書いている。)

の文では、брату <bratu> において日本語の「兄に」のように名詞の後部で格表示が行われているわけである。

[S V N-格表示] (「письмо < pisimo > 手紙」は省略してある。)

すると、SVO(英語型)なのに前置詞ではなく後置詞的なものが使用されていることになり、仮説は間違っていることになる。

D I .5.b では、仮説「格表示は名詞と動詞の間でなされる」は間違いか？

ロシア語には、仮説「格表示は名詞と動詞の間でなされる」は当てはまらないようにみえる。

次の英文の「to my brother」のように格表示が名詞Nの前にあれば、動詞と名詞の間ということで、問題は無いのだが。

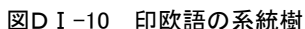
I write (a letter) to my brother.
S V 格表示-N

しかし、上に設定した仮説は普遍の原理的なものであるはずで、間違っているとは考えにくい。この仮説が正しいものとする、格表示が名詞の後ろにあるということ、ロシア語は元来日本語と同じく語順がSOV型であったのではないかと推論せざ

ロシア語は印欧語の1つであるので、印欧語の歴史を確認する必要がある。

「印欧語」とはインド・ヨーロッパ語族に属する言語の総称である。その言語は東はインド亜大陸や中央アジアのタリム盆地から、西はほぼヨーロッパ全域まで、また南北アメリカ、オーストラリアで、総計約 20 億人により使用されている。祖語は紀元前 3000 年以前に話されていて、その後の 1000 年の間に各言語に分裂したと考えられている。

印欧諸語を吉田(1996:54)は、シュライヒャーの系統樹モデルという考え方に基いて、下図のような系統図で示しているが、これによれば、ロシア語はスラブ語派の中に位置している。本稿では図中の注目したい部分を四角い枠で囲んだ。



また、松本(2006:26)は印欧諸語を次表のように年代順に分類している。この表においても注目したい部分に枠を設定した。

表D I -4 印欧諸語分類図(年代順)

松本(2006:26)

		前2千年紀	前1千年紀	紀元後	現 代
インド・イラン語派	インド語派		ヴェーダ語 サンスクリット語 パーリ語 プラークリット語		ヒンディー語 ウルドゥー語 マラティー語 ネパール語 ベンガル語 アッサム語 シンハラ語 その他
	イラン語派		古代ペルシア語 アヴェスタ語	パーレヴィー語 ソグド語 ホータン・サカ語 ホレズム語	現代ペルシア語 パロチー語 クルド語 パシュトー語 ヤグノービー語 オセチ語 その他
トカラ語				東トカラ語 西トカラ語	
アナトリア語派		ヒッタイト語	象形文字ルウィ語 リュキア語 リュディア語		
アルメニア語				古典アルメニア語	現代アルメニア語
ギリシア語		ミケナヤ・ギリシア語	古代ギリシア諸方言 コイネーのギリシア語	中世ギリシア語	現代ギリシア語
バルカン語派			イルリヤ語 トラキア語 ブリュギア語		アルバニア語
イタリック語派			古典ラテン語 オスク語 ウンブリア語	中世ラテン語 俗ラテン語 (ロマンス祖語)	ポルトガル語 スペイン語 カタロニア語 プロヴァンス語 フランス語 イタリア語 ルーマニア語
ケルト語派	ゲール語			古アイルランド語	アイルランド語 スコットランド語 マン島語
	ブリタニア語				ウェールズ語 ブルトン語
ゲルマン語派		東ゲルマン語		ゴート語	
ゲルマン語派	北ゲルマン語			古ノルド語	ノルウェー語 スウェーデン語 デンマーク語 アイスランド語
	西ゲルマン語			古英語 古低地ドイツ語 古高地ドイツ語	現代英語 オランダ語 ドイツ語
バルト語派				古プロシア語	リトアニア語 ラトヴィア語
スラヴ語派	南スラヴ語			古教会スラヴ語	ブルガリア語 セルボ・クロアチア語 スロヴェニア語
	東スラヴ語				ロシア語 ウクライナ語 ベラルーシ語
	西スラヴ語				ポーランド語 チェコ語 スロヴァキア語

※ の枠設定は今泉による。

D I.7 印欧語の語順は日本語と同じOV型であった

D I.7.a ヒッタイト語……日本語と同じSOV型

表D I-4 に見るように、ヒッタイト語は印欧諸語の中で最も古い言語に属するのであるが、松本(2006:43)は「印欧語の古い語順の型を知るためには、ヒッタイト語の証言がとりわけ重要である。」と述べ、「**ヒッタイト語は、およそ前 1600 から前 1200 年にいたるその記録時代の全般を通じて、印欧語としては最も首尾一貫したSOV型の言語である。**」としている。日本語と同じ型である。「すなわち、述語動詞は圧倒的な比率で文末位に現れ、**接置詞はすべて後置されて前置詞の用法は全く見られない。**」と続けている。松本の言う「接置詞」とは「名詞の広い意味での文法関係を表す形式」のことで、本稿では「格詞（格表示形式）」に相当する。さらに松本(2006:43)は「**古い時期の印欧語には一貫したVO型の言語が皆無である**」としている。

つまり、印欧諸語は元来日本語と同じOV型であったものと考えられる。このOV型(日本語型)の諸言語がVO型(英語型)の言語へと変化した事実について、松本はラテン語に起こった次のような変化による影響が大きいとしている。

D I.7.b ラテン語……SOV型(日本語型)からSVO型(英語型)へと変化

松本(2006:42)はラテン語について、「最古期のラテン語の語順の特徴は、サンسكريット語のそれに近いもので、基本語順はかなり厳格なSOV」であったと言う。これが古典期（紀元前1世紀～紀元後3世紀）になると、動詞の位置は文末位が優勢ではあるものの、語順がかなり自由になったとし、次表を掲げている。

表D I-5 古典ラテン著作家における基本語順: 動詞の末尾位置 松本(2006:42)

ラテン著作家	主文～従属文	[]は今泉補記
カエサル (ガリア戦記)	84%～93%	[紀元前1世紀]
サルスティウス	75%～87%	[紀元前1世紀]
カトー	70%～86%	[紀元前2～3世紀]
タキトゥス	64%～86%	[紀元 1～2世紀]
リヴィウス	63%～79%	[紀元前1世紀]

この表によれば、紀元前後ごろに諸著作家の文章において主文の動詞の位置が文末でなくなり始めていたことが分かる。動詞が日本語と同じ文末にある割合が減り始めていたのである。ただし、従属文の中では動詞が文末に保たれている割合は主文より高く、従属文は相対的に保守的であったことも表から分かる。

この古典期のラテン語はその後「俗ラテン語」の時期を経てイタリア語やスペイン語等の「ロマンス語」を生むことになるが、「俗ラテン語」の時期には「たとえば、紀元後4～5世紀の『イエルサレム巡礼記 Peregrinatio Aetheriae』で、動詞の末尾位置は、主文で 25 %、従属文で 37 %と激減」(松本 2006:43) しており、かなりVO化が進んだ。

以上の推移を簡単な時間軸の上に示せば次の図のようになるであろう。

紀元前100年	紀元	100年	200年	300年
古期ラテン語……………	古典ラテン語……………			俗ラテン語……………
SOV(日本語型)	語順自由(Vは文末優位)			SVO(英語型)化進む

図D I-11 ラテン語のSOV(日本語型)からSVO(英語型)への時間的推移

SOV型(日本語型)では格はNとVの間で(N-格 V)、つまり名詞Nの後ろで示すので、古期ラテン語は次表のような、格を**名詞後部**で表す「**格組織**」を持っていた。この点で、格を表す格詞を名詞の後ろに置く日本語と似ていた。

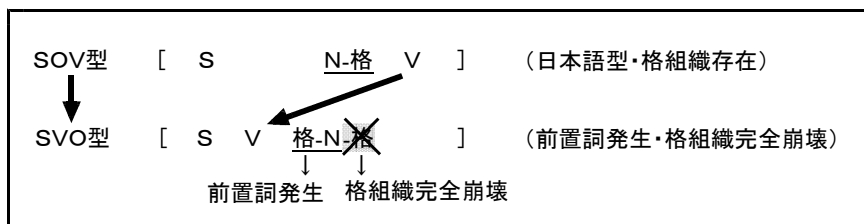
表D I-6 ラテン語の名詞の格変化 (名詞後部に現れる格組織) 松本(2006:45)

		I (女主人)	IIa (主人)	IIb (贈物)	III (王)
単 数	主格	domina	dominus	dōnum	rēx(rēg-s)
	対格	dominam	dominum	dōnum	rēgem
	属格	dominae	dominī	dōnī	rēgis
	与格	dominae	dominō	dōnō	rēgī
	奪格	dominā	dominō	dōnō	rēge
複 数	主格	dominae	dominī	dōna	rēgēs
	対格	dominās	dominōs	dōna	rēgēs
	属格	dominārum	dominōrum	dōnōrum	rēgum
	与格	dominīs	dominīs	dōnīs	rēgibus
	奪格	dominīs	dominīs	dōnīs	rēgibus

(この格組織は俗ラテン語からロマンス語にいたる段階でほぼ完全に崩れ去った。)

表中()内の語意は今泉補充

その後、VがNの前に出てSVO型(英語型)に変化して、格をVとNの間(V-格-N)、つまり名詞Nの前で表すことになり、「**前置詞**」が生まれた。格を前置詞の形で示すことになったので、この**名詞N後部の格組織は不要**となり、「**ほぼ完全に崩れ去**」った(松本 2006:48)。このことを概念図にすれば下図のようになるだろう。



図D I-12 SVO型(英語型)への変化で前置詞が発生し、格組織が崩壊した

例として、ロマンス語のひとつである現代スペイン語の文を示しておきたい。

Ella trabaja en la oficina hasta las cinco.
彼女 働く で - オフィス まで - 5時

下線部が前置詞である。SVO型になっていて、前置詞が使われ、名詞の後部に格組織を示すものはない。

ラテン語ではこのように、元来日本語と同じSOV型であった語順が、紀元前後に英語型であるSVO型の語順へと変化を始めた結果、前置詞が発生し、古い格組織が不必要となり崩壊した。当時の文化的先進地帯であったローマに起こったこの劇的な語順変化は、次第にヨーロッパ北部・東部へと拡散していった。

D I.7.c ゲルマン語(英語)……もとは日本語と同じSOVであった

ゲルマン語にも波及した。英語の場合を松本(2006:43)はこう述べている。「基本的にはSOV型であった古英語の末期から中期英語にかけての 3 ～ 400 年の間に、語順を含めて文法構造の全般が激しい変化をこうむり、現在見るような語順の型が出来上がったのは、ようやく近世の初めになってからである。」そして、その変化に関する Ch. フリーズの調査 (Fries 1940) を次表の形で紹介している(松本 2006:139)。

表D I-7 英語における語順の変化 (松本 2006:139) 表中 () は今泉補記

	c.1000	c.1200	c.1300	c.1400	c.1500
目的語－動詞	52.5%	53.7%	40.0%	14/3%	1.9%(日本語型)
動詞－目的語	47.5%	46.3%	60.0%	85.7%	98.1%(英語型)

(Fries 1940:201 では“Acc-obj. before verb” “Acc-obj. after verb”のように英語で記述され、枠はない。上表中の 53.7%はフリーズの原表では 52.7%となっており、40.0%は 40 + %, 60.0%は 60 - %, 14/3%は 14.3%, 1.9%は 1.87%, 98.1%は 98.13%となっている。)

この表から、英語の語順には、紀元 1000 年ごろには、SOV型(日本語型)とSVO型(英語型)がほぼ同等の割合で存在していたが、500 年後の 1500 年ごろに、ほぼ完全なSVO型になったということが見てとれる。英語が完全なSVO型(英語型)になったのは今から 500 年前にすぎないのである。

松本 2006:165 は、「日本語のOV的配列は、支配の方向性が驚くほど首尾一貫した最もプロトタイプに近い型と言ってよい。」とし、「この語順の型は、現存資料で遡りうる最古の時代から、基本的にほとんど変化がない」としている。英語は、この語順不変性を持つ日本語とは対照的な言語である。英語のSVO性が比較的新しいものであるということは認識しておく必要がある。

ちなみに、ドイツ語は、生成文法では、基本語順が日本語と同じSOV型であるとしている(たとえば 吉田 1995:8)。また、従属節の中ではいまだにSOV性が強い。従属節内部は保守性が高いからであろう。ドイツ語等の歴史も検討する必要がある。

なお、ギリシア語にはすでに紀元前 1200 年ごろにSVO型が現れ始めていることから、松本(2006:143) は「ギリシア語は印欧諸言語の中で最も早い時期にVO統語型の方
向へ歩みはじめた言語」であるとし、この傾向がラテン語からロマンス諸語へと受け
継がれていったと考えている。この推移は、概略次のように示せるであろう。

ギリシア語	→	ラテン語	→	ヨーロッパ諸語
紀元前千年紀ごろ		紀元後数百年後		英語は 1500 年ごろ

図D I -13 印欧諸語がSOV型(日本語型)からSVO型へ移行した時期

D I.8 ロシア語もSOV型(日本語型)からSVO型へ

D I.8.a ロシア語の特徴がつかめるのは 14 世紀後半以降

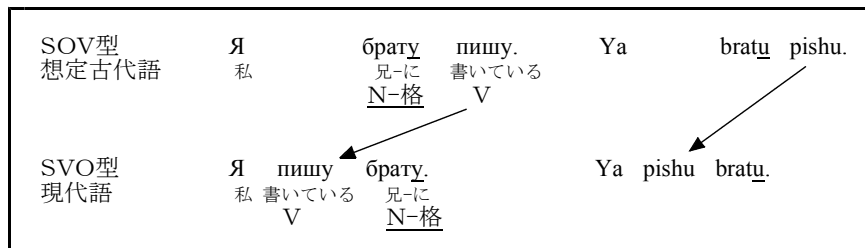
以上見てきたことから、印欧語であるロシア語の語順もSOV型(日本語型)からSV
O型(英語型)へと変化したものと考えられる。

ただし、佐藤 (2012:20) はロシア語の明確な特徴が形成されたのは 14 世紀後半
(日本では室町時代)以降であるとし、それ以前の東スラブ人が残したロシア語の母体
になる文献資料でさえ 11 世紀前半(日本では平安時代後半)までしか遡ることができ
ないとしている。つまり、それ以前は文献資料には依拠できないのである。

本稿がここで行っている推論は、まだロシア語(スラブ語)として形をなす以前の、
文献記録で実証できない時期に想定する推論であることになる。しかし、この推論が
正しいとすれば、問題の現代語の文ではいまだにSOV型(日本語型)の性質が保たれて
いることになる。

Я пишу письмо брату. (私は兄に手紙を書いている。)
私 書く 手紙 兄-に <Ya pishu pisimo bratu.>

確かに、語順が日本語と同じSOV型であった時期の、格表示が名詞と動詞の間で
なされる(N-格 V)という特徴、つまり後置式(N-格)である特徴が現代語に残って
いるのだということになる。ロシア語(スラブ語)では 11 世紀より前は文献では実証で
きないが、印欧語の歴史からして、こう推論するのが妥当であろうということになる。
このことを概念図にすれば下図のようになる。



D I .8.b ロシア語は格組織温存……二重の格表示に

印欧語一般としてSOV型(日本語型)からSVO型(英語型)に変化したため、ロシア語も格表示のための前置詞を持つことになった。たとえば、現代語の

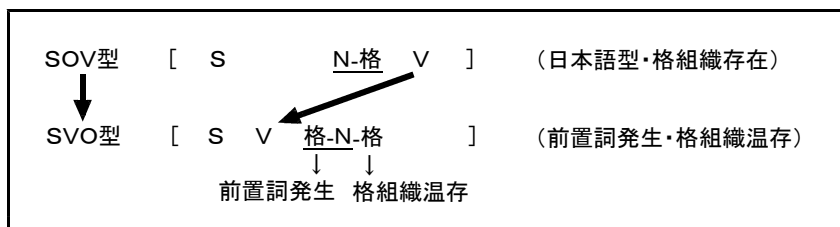
Я приехал из Японии. (私は日本から来た。)
私 来た から-日本 Ya prichehal iz Yaponii.

という文で、名詞「日本 Японии 〈Yaponii〉」は、「から」を意味する「из 〈iz〉」という前置詞を用いて、離脱点を示す格にあることを示している。

ロシア語でもこのようにSVO型に変化して前置詞が発生したのである。それで、名詞の後ろの格組織は不要となったはず、であった。ところが、ラテン語の場合と異なり、この格組織が崩壊することはなかった。上の「日本 Японии 〈Yaponii〉」は実は「日本 Япония 〈Yaponiya〉」の生格形なのである。

主格	Япония	(日本が)	〈Yaponiya〉
生格	Японии	(日本の)	〈Yaponii〉
与格	Японии	(日本に)	〈Yaponii〉
対格	Японию	(日本を)	〈Yaponiyu〉
造格	Японией	(日本によって)	〈Yaponiei〉
前置格	Японии		〈Yaponii〉

つまり、現代ロシア語は格を表示するのに「新たに生じた前置詞」と「格組織」の二重の形式を用いているのである。このことを概念図にすれば下図のようになるだろう。



図D I -15 ロシア語はSVO型への変化で格組織を温存し二重の格表示へ

この格の二重表示法を現代語の次の例で確認したい。

Дети стояли с букетами в руках.
子どもたち 立っていた と共に-花束(造格) に-手(前置格)
(子どもたちは花束を手を持って立っていた。)
〈 Deti stoyali s buketami v rukah. 〉

確かに、с букетами 〈s buketami〉と в руках 〈v rukah〉において格表示の二重性が確認できる。

英語であれば、名詞後部の格組織が消滅しているので、前置詞だけでよく、with a bouquet / in handのように、名詞後部の変化は必要ない。(ただし、英語でも with him のように、代名詞の場合だけは格変化が残っていて、二重格表示となっている。)

ロシア語がこのようにSVO型(英語型)になっても奇跡的に古い格組織を温存した理由について、松本(2006:48)は、ユーラシアで最も発達した格組織をもつフィン・ウゴル諸語と接触していたためであるとしている。(結婚等日常生活での言語交流が密であったためである。)(これに関しては、ドイツ語等の場合も考える必要がある。)

以上により、第2の疑問「ロシア語でもこの仮説が成立するか」に対する解答が、印欧語としての類似性を考慮すれば、「成立する」という形で得られたことになる。SOV型(日本語型・格組織保持)時代とSVO型(英語型・前置詞使用)時代の両方でこの仮説が成立することが考えられるからである。

第2の疑問への解答

現代ロシア語には前置詞があり、格表示は名詞と動詞の間でなされていると考えられる。ただし、名詞の後部にも格表示要素があるが、これは古代印欧語としてのSVO型(日本語型)の名残である。

ロシア語については別の新たな疑問がわく。単純性をめざす結果として、逆に二重の格表示になってしまい、複雑性が増してしまった。これは過渡的な一時的な現象で、数百年の後には解消されることになるのか。その方向はすでに始まっているのか。関心をもって見守りたい(次節参照)。

D I.9 なぜSOV型(日本語型)がSVO型(英語型)に移行する必要があったのか

次にこの疑問が生じる。

第3の疑問 印欧語はなぜSVO型に移行しなかったのか。

D I.9.a 格表示の複雑さ解消のためにSVO型(英語型)に移行

同じSOV型(日本語型)でも、印欧語の名詞後部の「格組織」は、日本語の「格詞」とは異なり、性と数と格の混在する、いわゆる「屈折性」を持つようになってしまった。(「屈折」は名詞では「曲用」、動詞では「活用」ともいう。)表D I-6 で見たように、たとえば、主格ひとつを取ってみても、日本語なら、「主人(たち)が」の「が」で済むところを、男性か女性かで、また単数か複数かで、次のような異なる形を使わなければならなかった。

主人(たち)が …… domina (女単), dominus (男単), dominae (女複), dominī (男複)

対格も、日本語なら「主人(たち)を」の「を」で済むところを次のように言い分けねばならなかった。

主人(たち)を …… dominam (女単), dominum (男単), dominās (女複), dominōs (男複)

この屈折性が印欧語の優越性とみなされる傾向もあったが、実はこの屈折性は、複

雑性でもあり、**不透明性**でもあった。分析しにくく、そのまま記憶(暗記)して使用せざるを得なかった。学習者にとっても重い負担であった。

この格組織を日本語の膠着性の格詞(が、を等)のように単純な、透明性の高いものに戻すためには、複雑になってしまった名詞後部の**屈折性を解消**すればよかった。しかし、それはかえって新たな混乱を生じさせる恐れがあった。そこで名詞後部の格組織の改良使用を断念して、かわりに思い切って**動詞VをOの前に出して**、そのVとOの間に格表示の**前置詞を創り出す**という方法を取るようになった。

それで、第3の疑問への解答として、このような仮説が立つ。

第3の疑問への解答……仮説

印欧語のSOV型(日本語型)では、日本語等と異なり、**名詞後部の格表示が屈折性を持って複雑になってしまった**。その屈折性という不透明性と決別するために、思い切って**VをOの前に出して、VとOの間に新たに格を表示する前置詞という形式を創り出した**。それでSVO型が生じたのである。

動詞Vを名詞の前に置けば、格表示形式は、動詞と名詞の間(つまり名詞より前)に置けばよかった。**格表示形式としての新しい単純な前置詞を創れば良かった**。名詞そのものは名詞の後部で形を変える必要がなくなった。

I go to school by bus.

また、判断の上で重要で使用頻度の高い、主格、対格の格表示は不要となった。

I read a book.

SVO型(英語型)が人類にとってよりふさわしい語順であるからこれをめざした、というわけではないのであろう。印欧語では、SOV型(日本語型)のO(名詞)が屈折性を持ったために複雑になってしまったので、単純性を取り戻したかった。しかし、昔のSOV型(日本語型)に戻そうとしては、さらに混乱を招く恐れがあった。それで、思い切って動詞を名詞の前に出してVOの型に変えたのであろう。

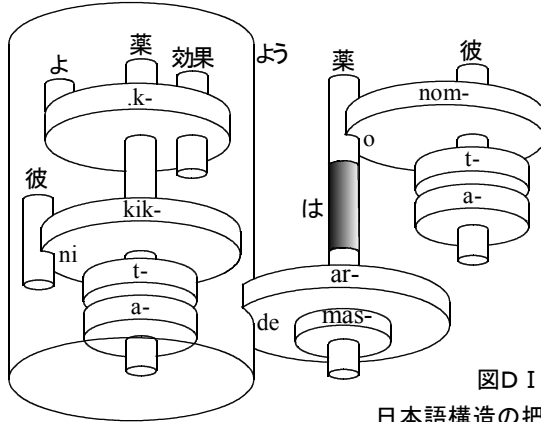
D I.9.b 日本語の膠着性は構造を把握しやすい……日本語構造伝達文法

SOV型(日本語)の元来持つ**膠着性**については、松本(2006:50)も、「膠着性とは、要するに、接辞法における透明性にほかならない。」と述べている。印欧語のSOV型が持つに至ってしまった**屈折性**は、日本語の**膠着性**の透明性に対して、解消されるべき不透明性にほかならなかったのである。

幸いにも屈折性を持つことを免れた日本語のようなSOV型では単純な膠着性を保ってきた。順次付加されるそれぞれの文法要素は、分析して取り出しやすく、機能が捉えやすく、したがって構造が理解しやすいという特徴を持っている。

「日本語構造伝達文法」は、このSOV型(日本語型)の膠着性の、分析のしやすさと構造の把握しやすさのおかげで誕生したと言える。図D I-16、-17 として一例を挙げる。

彼が 飲んだ 薬は よく 効いた ようです。 (□内は発音せず。)
 kare-ga nom-i=t-Ø=ar-u kusuri-Øi-wa yo.k-u kik-i=t-Ø=ar-u yoo-de=ar-i=mas-u
 n-d

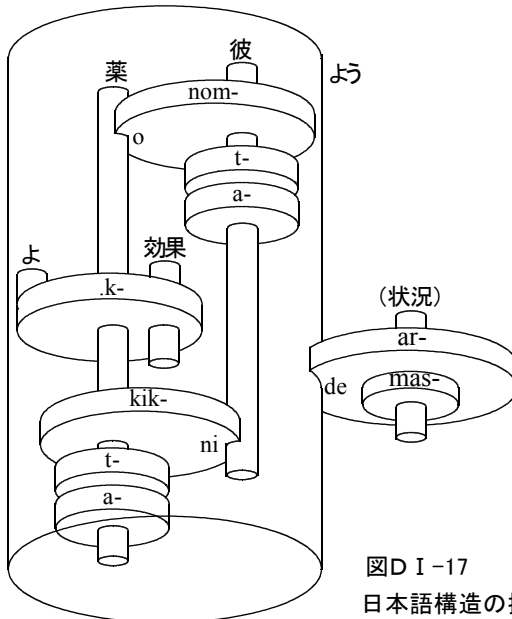


図D I -16

日本語構造の把握しやすさの一例(1)

上の例は「薬」が「は」により主題化されており、「薬」についての不確かな断定を表している。この主題化をはずせば、下の構造のように事象全体が断定の対象となる。

彼が 飲んだ 薬が よく 効いた ようです。 (□内は発音せず。)
 kare-ga nom-i=t-Ø=ar-u kusuri-ga yo.k-u kik-i=t-Ø=ar-u yoo-de=ar-i=mas-u
 n-d



図D I -17

日本語構造の把握しやすさの一例(2)

図D I -16 は「は」による主題を持ち、図D I -17 は主題を持たない。

細かい説明はここではしないので、『日本語構造伝達文法』ないしは『日本語のしくみ』の関係部分に当たっていただければ幸いである(右ページの既刊書リスト参照)。

D I .10 結論

第1, 第2の疑問への肯定的な解答から「格表示は名詞と動詞の間でなされる」という仮説はSOV型, SVO型の両方(全言語の 85 %を占める。)において基本的に成立するであろうということになった。

今回は名詞の格を中心とする考察であったが、これだけでも、印欧語ももとは日本語と同じSOV型であったことがより明確になった。また、第3の疑問となった、「なぜ印欧語がSOV型からSVO型に変化したのか」についても考察し、名詞の屈折性(格表示の複雑性)からの決別のためであったとの仮説を得た。

D I .11 今後の課題

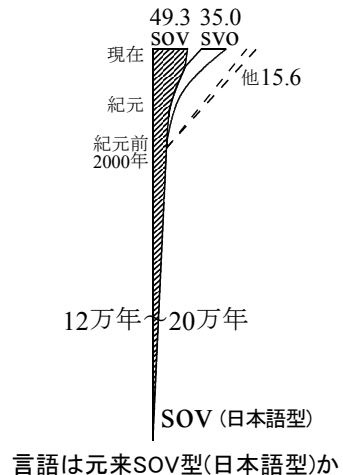
いくつかの今後の課題が出てきた。

① 今回はSOV型(日本語型)とSVO型(英語型)での考察となった。この2者で世界にある現在の語順のほぼ85 %を占めるが、残りのほぼ15 %を占めるその他の語順型でも本稿での仮説が成立するかどうかにつき確認する必要がある。(中国語の扱いについての検討が必要である。)

② また、SVO型(英語型)も、元来SOV型(日本語型)であった可能性が高く、人類にとってのSOV型(日本語型)の本性性・重要性を探ることも必要と思われる。

われわれ現生人類はミトコンドリア・イブ1人を理論的・起源的な母として持つ、という学説もある。その真偽はともあれ、いずれにせよ起源的な人間の存在は想定できるであろう。とすれば、そのおおもとの言語は日本語型のSOV型であった可能性が高い。

右図はこれを概念図にしたものである。数字は表D I -2 から得た百分率である。(点線の部分は本稿では扱っていないので、その妥当性についての調査は今後の課題である。)



図D I -18

③ 言語は透明性・単純性をめざしているもののようである。屈折性は、これをめざす過程で、言語的な工夫が逆の結果をもたらしてしまったものと考えられる。現代言語研究の中心に位置している観のある英語なども、単純性をめざす変化の過程にある

ものとみられる。

日本語は、松本(2006:165,167)によれば、「インド亜大陸のドラヴィダ諸語、アジア北・東部のアルタイ諸語と共に、OV言語圏の中の最も安定したタイプに属し」、類型論的に見る限り、古くから基本的にほとんど変化がなく、「世界に最も仲間の多いきわめて平均的かつ標準的な言語である。言語の世界で特異な位置を占めるのは、むしろ西洋の近代諸語」である。

日本語は、文字の問題は別として、言語自体は、文法要素の透明性も高く、分析しやすく、構造の把握しやすい言語である。改めてこの観点から言語研究における日本語研究の重要性を捉え直してみる必要がある。

※引用部内の文字のゴシック化は今泉が施した。

※本稿は今泉の定年退職最終講義の前半をまとめ、『言語と交流』第18号(2015年)に掲載したものである。本書への収載にあたり加筆した。

〔日本語構造伝達文法〕の既刊書リスト

〔研究書〕

- ①『日本語構造伝達文法 〔改訂12〕』今泉喜一(2000, 改訂2012) 揺籃社
構造モデル、時間等、「日本語構造伝達文法」の基本的な考え方を述べる。
- ②『日本語構造伝達文法 発展A』今泉喜一(2003) 揺籃社
主格・を格／テ形音便／タ形／絶対・相対テンス／従属節等について述べる。
- ③『日本語態構造の研究－日本語構造伝達文法 発展B－』今泉喜一(2009) 晃洋書房
原因態・許容態／二段活用が発生と一段化／態拡張による新動詞の発生を扱う。
- ④『主語と時相と活用と－日本語構造伝達文法・発展C－』今泉喜一(2014) 揺籃社
主語・二重主語／うなぎ文／活用の新しい捉え方／古代語の時相等を扱う。

〔入門書〕

- ⑤『日本語のしくみ(1)－日本語構造伝達文法S－』今泉喜一(2015) 揺籃社
構造の基本(3主格、否定、活用、時相)／複主語／態(許容態、原因態、受影態)
- ⑥『日本語のしくみ(2)－日本語構造伝達文法T－』今泉喜一(2016) 揺籃社
時と局面／事象と局面表示／絶対時・相対時／時間表現4種類／時間の否定
- ⑦『日本語のしくみ(3)－日本語構造伝達文法U－』今泉喜一(2017) 揺籃社
形容詞／形容詞10構造／形容詞複主語／形容詞否定構造／形容詞時間表現

D I 参考文献

- 池田 潤 (2011) 『ヘブライ語文法ハンドブック』 白水社
 泉井久之助 (1968) 『ヨーロッパの言語』 岩波書店
 今泉 喜一 (2012) 『日本語構造伝達文法 [改訂12]』 揺籃社
 今泉 喜一 (2003) 『日本語構造伝達文法 発展A』 揺籃社
 今泉 喜一 (2009) 『日本語態構造の研究－日本語構造伝達文法 発展B－』 晃洋書房
 今泉 喜一 (2014) 『主語と時相と活用と－日本語構造伝達文法 発展C－』 揺籃社
 大西 泰斗ほか (2011) 『一億人の英文法』 ナガセ
 小沢 重男 (1968) 『モンゴル語の話』 大学書林
 亀井 孝ほか・編 (1988～1996) 『言語学大辞典』全6巻 三省堂
 菅野 裕臣・監修 (1987) 『朝鮮語を学ぼう』 三修社
 呉 茂一 (1952) 『ラテン語入門』 岩波書店
 言語と交流研究会 (2015) 『言語と交流』第18号 凡人社
 小泉 保 (1994) 『ウラル語統語論』 大学書林
 高津 春繁 (1954) 『印欧語比較文法』 岩波書店
 高津 春繁 (1992) 『比較言語学入門』 岩波書店
 佐藤 純一 (2012) 『ロシア語史入門』 大学書林
 城田 俊 (1993) 『現代ロシア語文法』 東洋書店
 ジャン・コラル・著 有田 潤・訳 (1968) 『ラテン文法』 白水社
 竹内 和夫 (1970) 『トルコ語文法入門』 大学書林
 竹内 和夫 (1991) 『現代ウイグル語四週間』 大学書林
 辻 直四郎 (1974) 『サンスクリット文法』 岩波書店
 角田 太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
 R.M.W.ディクソン・著 大角 翠・訳 (2001) 『言語の興亡』 岩波書店
 中島 悠爾ほか (2003) 『必携ドイツ文法総まとめ改訂版－』 白水社
 バーナード・コムリー・著 松本 克己ほか・訳 (1992) 『言語普遍性と言語類型論－
 統語論と形態論』 ひつじ書房
 服部 四郎・編 (1971) 『言語の系統と歴史』 岩波書店
 久松 健一 (2000) 『携帯(万能)フランス語文法』 駿河台出版社
 藤田 五郎 (1974) 『テーブル式 ドイツ語便覧』 評論社
 H.ブラッドリ・著 寺澤芳雄・訳 (1982) 『英語発達小史』 岩波書店
 北京大学中文系現代漢語教研室・編 松岡榮志ほか・監訳 (2004) 『現代中国語総説』
 三省堂
 町田 健 (2008) 『言語世界地図』 新潮社
 松本 克己 (2006) 『世界言語への視座－歴史言語学と言語類型論』 三省堂
 松本 克己 (2014) 『歴史言語学の方法－ギリシア語史とその周辺』 三省堂
 松山 納 (1965) 『東南アジア語の話』 大学書林
 山田 善郎 (1967) 『インデックス式 スペイン文法表』 白水社
 山本 秀樹 (2003) 『世界諸言語の地理的・系統的語順分布とその変遷』 溪水社
 吉田 和彦 (1996) 『言葉を復元する－比較言語学の世界』 三省堂
 吉田 光演 (1995) 「ドイツ語の語順の変動について」『広島ドイツ文学』9号 広島独
 文学会
 R.ルーウィン・著 保志 宏・訳 (2002) 『ここまでわかった人類の起源と進化』
 ロドニー・ハドルストンほか・著 高橋邦年・監訳 (2007) 『ケンブリッジ 現代英
 語文法入門』 Cambridge University Press
 Fries, Ch. (1940) On the development of the structural use of word order in Modern English,
 Language 16.
 H.A.Jaschke (1954) TIBETAN GRMMAR, Frederick Ungar Publishing co.